本屋探訪

佐久間文子（ライター）

29

創業から三百年 全国チェーンに負けない秘訣

八文字屋本店
山形県山形市本町2-4-11
TEL 023-622-2150

二年に一度、十月に開かれる山形国際ドキュメンタリー映画祭が面白い。世界中で制作された、さまざまなドキュメンタリーをいちどきに見ることができる。劇映画のような派手さはないがクオリティーの高さで定評があり、財政難に苦しみながらも今年で十回目になる。

「いい本屋さんだ」とかねて山形の知人が自慢する「八文字屋」も、映画祭に来るたびにのぞくようになった。

すみずみまで人の手がきちんと入っている印象がある。たとえば雑誌。いちばん上の一冊に、見本用としてビニールカバーがかけられている。超大型店というわけでもないのに、一階奥にはインフォメーションカウンターが設けられている。年配の男性客を相手に、若い女性書店員が丁寧に本の相談に応じていた。

店の中心部、吹き抜けに下がる巨大なちょうちんと、一枚板の看板が八文字屋のシンボルマークだ。待ち合わせの目印に使われることも多い。いまや街角から消えつつある公衆電話ボックスが、中央大階段横に鎮座ましましている。かつてのモダンが、いい具合にレトロに溶けこんでいる。

創業三百年という老舗書店だ。もともと、山形の名産紅花を商う家で、京都へ紅花を売りに行き、からになった船で浮世草子の八文字屋本を持ち帰ったのが店名の由来だという。

九・一一のテロで中断するまでの十年間は、「バーンズアンドノーブル」などアメリカの有名書店を見学するため、社員を研修旅行に派遣してきた。

「あちらの書店は『ブック、ミュージック、コーヒー』が楽しめると言うけど、コーヒーを出すのも店の一角でお話の会を開いたりするのも、うちの店でもやっていたことでした。ただ、本のディスプレーの美しさには身をもって刺激を受けましたね」と本店店長の佐藤健一郎さん（60）はいう。最近はどこの書店でも手書きポップが全盛だが、この店では「見た目が綺麗ではないから」と置いていない。

ドキュメンタリー映画祭の成功もあって、山形＝映画の町のイメージは浸透しつつある。九月に訪ねたときには、二階の一角に映画祭のコーナーができていた。映画祭期間中は、一階のいい場所に移されるという。過去の映画祭のパンフレットや特集された映画に関連した本が並び、選考委員の蓮實重彦さんの「映画狂人」シリーズや、「阿賀に生きる」などの秀作を遺して先日亡くなった映画監督、佐藤真さんの著書もそろっていた。

山形の「食」もまた注目されている。テレビの「情熱大陸」で取り上げられ、首都圏からツアーが組まれるほどの人気の鶴岡のレストラン、アル・ケッチァーノの本『奇蹟のテーブル』や、地産地消をうまく取り入れているそのシェフらが書いた『どこかの畑の片すみで』（山形在来作物研究会編）といった本も、店内の一等地に置かれていた。

文芸は八文字屋がもっとも力を入れているジャンルのひとつだ。優しい色合いのピンクの水玉の表紙を、地元の本のコーナーで見つけた。書評を見て気になっていた、日塔貞子の詩集『私の墓は』（桜桃花会）だ。奥付には初刷が一九五七年、第二刷はその半世紀後の二〇〇六年となっている。現在は三刷。

夭折した山形出身の詩人に関心をもった女性四人のグループが、まず彼女の伝記（『雪に燃える花』）を再刊、ついで詩集も復刊させたのだそう。復刊時には地元のテレビで紹介されたりして、ずいぶん話題になったらしい。新刊書店ではほとんど見ることのない、森敦『月山』（河出書房新社）の単行本があるのも山形らしいと思った。

「やまがた街角」というタウン誌も出していて、編集部は八文字屋内に置かれている。古い和菓子屋や旧家に残っている蔵など、町中の暮らしの営みを記録にとどめておこう、とつくられているそうだ。山形在住の文芸評論家池上冬樹さんが、作家志水辰夫さんや逢坂剛さんを迎えて対談するなど、小説雑誌ばりの企画もある。

「戦争にあっていない古い町だから、古い町の良さがある。料亭が四つもあって、芸者衆にはうちの祖父から私の孫まで、八文字屋を五代、知ってる人までいるんですから」。十二代当主の五十嵐太右衛門さん（56）は笑う。いまの本店は一九七〇年の建築だが、それまでは店の裏が自宅で家族も従業員もみな一緒に住み、文字通り本に囲まれて育った。

ナショナルチェーンの出店攻勢で地方の老舗書店はどこも苦戦をしいられている。八文字屋もまったく例外ではないが、県内だけでなく仙台にも店を出すなど、そのなかでは健闘している。

天童市に新しく出店した東北最大規模の店舗も見に行った。本店から車で三十分ほど。巨大なブーメランのかたちの郊外型書店で、短いほうの翼に文芸書や雑誌、文庫、長いほうにコミックやCD、DVDなど。大型ショッピングモールのようで、本店とは客層がまったく異なり、家族連れ、圧倒的に子供の客が多い。レジはホテルのカウンターをイメージしている。

「いま小売りはたいへんだと言われるけど、小売りってやっぱり面白い。人間がそのまま出る。だから従業員の教育にもコストをかけたい。地域の一番店として、これからも試行錯誤を続けたいですね」「ナショナルチェーンは出店して、だめとなったら撤退していく。その数年の間に地方の本屋はつぶれていく。ほんとうにそれでいいのかな」。十二代五十嵐太右衛門さんはそう話すのだった。